

## Application of Piano-playing as seen in the Japanese Music Journals during the Meiji Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 友香理 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026985">https://doi.org/10.14945/00026985</a>

## 明治期の音楽雑誌にみるピアノ教育

Application of Piano-playing as seen in the Japanese Music Journals during the Meiji Period

後藤 友香理<sup>1</sup>

GOTO Yukari

（令和元年12月2日受理）

### 1. はじめに

我が国ではピアノ教育がさかんに行われており、教育機関で直接学ぶ以外にも、専門雑誌や専門書などで奏法に関する情報は広く発信されている。それでは西洋音楽の導入期である明治期において、ピアノ奏法はどのように説明され発信されていたのだろうか。公の音楽教育機関であった音楽取調掛および東京音楽学校でのピアノ教材やカリキュラムについては、市川（1996）、国府（1999）らの研究でその内容をある程度把握することができる。確かに東京音楽学校でのピアノ教育は当時の日本の最先端であったことは間違いない。しかし、ごく限られた人間しかその教育を受けられなかったことも事実である。明治は様々な音楽雑誌が生まれた時代でもあり、それらに掲載された当時の人々の生の意見や情報は、雑誌という媒体の持つ継続性や速報性、記録性などを鑑みれば、貴重な資料に違いない。

本稿の目的は、ピアノに関する記事を中心に明治期の音楽雑誌をあたり、当時のピアノをめぐる状況を調査することである。その際、①音楽雑誌に掲載された記事が、当時の社会や音楽教育をめぐる状況とどのように関わっているか、②当時のピアノ奏法がどのような点に主眼を置いているのか、の2点を中心に考察したい。

### 2. 明治期のピアノとピアノ教育の導入

我が国における公のピアノ教育は音楽取調掛に始まるとされており（国府1999:25）、明治12年10月に音楽取調掛が設置されると翌13年には10台のピアノがアメリカから送られたことがわかっている。しかし、楽器としてのピアノの導入はそれより早く、明治9年に女子師範学校の附属幼稚園の開園に伴って1台、そして明治11年から12年にかけて体操伝習所に6台のピアノがすでに導入されていた（武石2009:18）。このことは、ピアノが音楽教育分野だけでなく、女子教育、幼児教育、体操教育など幅広い分野に資する楽器として着目されていたことを裏付けている。しかし、せっかくピアノを導入してもそれを演奏できる人材がないことがすぐに明らかとなり、かえって音楽の人材養成が急務であることが認識された。

こうして、音楽取調掛では明治13年9月に第1回の伝修生を募り、唱歌とともにピアノの教授が開始された（遠藤1948:83-84）。しかし、当時ピアノを製造できる国内会社は存在せず、高価な輸入楽器に頼るしかなかったことから、次第にピアノよりも安価なオルガンが唱歌の伴

---

<sup>1</sup> 音楽教育系列

奏に用いられるようになる。明治17年には、もともと邦楽器製造業者であった西川虎吉(1849-1920)が国産部品を使ったオルガン製造に成功し(田中2016:78)、その数年後には、のちのヤマハ株式会社創業者である山葉寅楠(1851-1916)もオルガン製造に成功する。このように伴奏楽器としてのオルガンの需要が教育機関で高まるにつれ、西川と山葉の他にも次々とオルガン作りの会社が立ち上がり、国内におけるオルガン製造の動きは過熱していった。

一方、ピアノは唱歌の伴奏という役割をオルガンに取って代わられたが、音楽取調掛において新たな存在意義を確保していく。それは歌詞を伴わない演奏、つまりピアノ演奏そのものに価値をもとめる教育であり、ピアノは次第に専門教育に特化されていくようになる(市川1996:49)。

明治20年に音楽取調掛は東京音楽学校となる。「音楽教員及音楽士ヲ養成スル」という目的で開校するが、音楽士つまり演奏家の養成が主務であり、それに音楽教員の養成を兼務するというのが本音であったという。そして明治33年にはとうとう演奏家養成コースを「本科」、音楽教員養成コースを「甲種師範科」とし、「本校ハ汎ク音楽ノ教授ト攻究ヲナシ兼ねて音楽教員ヲ養成スル」と明文化された(坂本2012:75)。これにより、東京音楽学校のピアノ教育とは「ピアニストを育てるための独奏中心の指導」という方向性が定まったことになる。奇しくも同年、日本初の国産ピアノ第1号が山葉によって製作され(前田・岩野2001:26)、以降国産ピアノの製造が盛んになっていく。ピアノを使用した演奏会がそれまで以上に頻繁に開催されるようになり、演奏水準も学校教育程度のレベルから芸術的要素が求められる時代へと入っていく。こうした流れの中、久野久(1886-1925)、小倉末子(1891-1944)などの日本人ピアニストが次々と東京音楽学校から生まれるのである。

以上の明治期におけるピアノの状況を、楽器としてのピアノと、ピアノ教育という2つの視点から整理すると、①海外からの輸入→オルガンで代用→自国で製造、②唱歌の伴奏をするための教育→独奏のための教育、という流れで説明することができる。それでは、このような転換期に音楽雑誌はどのような役割を果たしていたのだろうか。

### 3. 明治期の音楽雑誌の概観

我が国最古の雑誌は慶応3年創刊の『西洋雑誌』であると言われているが(後藤1982:26)、洋楽関係雑誌の歩みは四竈訥治によって明治23年9月に創刊された『音楽雑誌』(音楽雑誌社)に始まる(表1参照)。『音楽雑誌 復刻版・補巻』によれば、四竈は明治17年の音楽取調掛の県派出伝習生となった後、「東京唱歌会」と称する私塾を開いたり、音楽会を主催するなどジャーナリスティックな音楽活動に積極的に関わっていった(増井1984:9-11)。しかし財政難のため、第59号からは共益商社に雑誌を委ねることになる。それに伴い、雑誌名も第61号より『おむ賀く』、76号より『於武賀久』と変わり明治31年2月(第77号)まで続いた。『音楽雑誌』は洋楽だけでなく邦楽や明清楽など様々な分野の音楽を取り上げ、新譜の紹介、音楽小説、演奏会レポート、楽器紹介など多岐にわたるが、その内容にはやや雑多な印象も受ける。

『音楽雑誌』に続き、明治29年4月に『同声会雑誌』(同声会)が創刊された。同声会とは東京音楽学校(現・東京藝術大学)同窓生による組織のことであり、『同声会雑誌』はその会報の役割を持っていた。

明治34年11月には『音楽之友』(楽友社)が創刊され、38年3月(第7巻第5号)まで続いた。雑誌創始者の高折周一と巖本捷治はそれぞれヴァイオリン、ピアノで東京音楽学校本科

を卒業した演奏家であり、『音楽雑誌』と比べてより洋楽の専門的な記事が多いのは、約半年間だけ音楽取調掛の伝習生であった四竈と、東京音楽学校本科を卒業した高折・巖本との違いを反映しているといえよう。『音楽之友』は明治38年4月からは『音楽』（楽友社）と名前を変え、40年12月（第13巻2号）まで継続した。

表1 明治期に創刊された音楽雑誌一覧

雑誌名	出版元（出版地）	創刊	備考
音楽雑誌	音楽雑誌社、 共益商社書店（東京）	明治23（1890）年9月	
同声会雑誌	同声会（東京）	明治29（1896）年4月	
音楽之友	楽友社（東京）	明治34（1901）年11月	継続後誌：音楽
音楽遊戯界	共究社（東京）	明治36（1903）年1月	
音楽月刊	石原楽器店（大阪）	明治36（1903）年1月	
音楽新報	音楽新報社（東京）	明治37（1904）年2月	継続後誌：音楽界
音楽	楽友社（東京）	明治38（1905）年4月	継続前誌：音楽之友 継続後誌：音楽界
九州音楽		明治39（1906）年ごろ	詳細不明
音楽世界	十字屋田中商店楽器部（京都）	明治40（1907）年1月	
音楽月報	（名古屋）	明治40（1907）年ごろ	詳細不明
音楽界	楽界社（東京）	明治41（1908）年1月	継続前誌：音楽新報、音楽
音楽	東京音楽学校校友会編、共益 商社楽器店（東京）	明治43（1910）年1月	
月刊楽譜	松本楽器（東京）	明治45（1912）年1月	所蔵状況が悪く、散逸しかけている

明治36年1月には『音楽遊戯界』（共究社）が創刊したが、わずか1年ほどで廃刊している。この雑誌は「遊戯」という雑誌名の通り、舞踏や体操、及びそれらに関係する音楽が取り上げられており、同時代の他の音楽雑誌とはやや異なる方向性を持っている。同じ年に、大阪で『音楽月刊』（石原楽器店）も創刊された。

明治37年2月には『音楽新報』（音楽新報社）が創刊した。内容は洋楽に限らず清楽、韓国の舞楽、雅楽、民謡や神楽なども頻繁に取り上げているが、モーツァルト（第3巻第1号）やシューマン（第3巻第8号）など特定の作曲家を特集した「記念号」を作るなど、今日のクラシック音楽雑誌にも通じるものが感じられる。

ここまで挙げた音楽雑誌は東京と大阪で出版されたが、同時期に九州で『九州音楽』、名古屋で『音楽月報』という雑誌が創刊したと見られる。しかし、現在は所在を確認することができず詳細が不明である（国立音楽大学音楽研究所1978：20）。

明治40年1月には京都で『音楽世界』（十字屋田中商店楽器部）が創刊し、大正4年まで続いた。楽器店発行の雑誌であるため、店の宣伝を兼ねた比較的大衆的な内容を持っている。

明治41年1月には『音楽界』（楽友社）が創刊するが、この雑誌は先に挙げた『音楽』と『音

楽新報』の2誌が統合し改称したものであり、大正12年まで継続している。

明治43年1月には東京音楽学校が編集する『音楽』（共益商社楽器店）が創刊した。当時の東京音楽学校の教授陣による学術的な記事や、楽壇のさまざまな歴史が詳細に記録された専門的な音楽雑誌であり、昭和15年まで続いている。東京音楽学校卒業生の消息や活動についての記事も多いが、単なる同窓会誌にとどまらず、総合音楽雑誌として近代日本が洋楽をどのように見て、取り入れようとしていたのかを知ることでできる貴重な記録である。先に述べた『音楽雑誌』や『同声会雑誌』に始まり、明治期の音楽雑誌のほとんどが編集人等で東京音楽学校及びその関係者と深いつながりを持っている。

明治期に最後に創刊された音楽雑誌が、明治45年1月創刊の『月刊楽譜』（松本楽器）である。昭和16年まで続き、現在の音楽雑誌『音楽の友』へとつながる雑誌である。明治期に創刊した音楽雑誌では最も長く続いた雑誌だが、どの図書館でも所蔵状況が悪く、明治期に刊行された巻号はもはや確認することができない。

#### 4. 調査方法および調査した雑誌と巻号

各音楽雑誌の目次を頼りにピアノに関連する記事を調査した。国立国会図書館をはじめ可能な限り各図書館で資料をあたったが、雑誌によってはすでに散逸している巻号もある。今回調査を行った雑誌と巻号は以下の通りである。

- ・『音楽雑誌』<sup>(1)</sup>…全巻（第1～76号）
- ・『同声会雑誌』<sup>(2)</sup>…第1～6号、第12号
- ・『音楽之友』<sup>(3)</sup>…全巻（第1巻第1号～第7巻第5号）
- ・『音楽遊戯界』…全巻（第1巻第1号～第2巻第3号）
- ・『音楽月刊』…第19号、第23号、第25～29号
- ・『音楽新報』…全巻（第1巻第1号～第4巻第11号）
- ・『音楽』（楽友社）…全巻（第7巻第6号～第13巻第2号）
- ・『音楽世界』…明治期に刊行された第1巻第1号～第7巻第5号（第7巻第4号は欠号）
- ・『音楽界』…明治期に刊行された第1巻第1号～第5巻第8号
- ・『音楽』（共益商社楽器店）…明治期に刊行された第1巻第1号～第3巻第7号

#### 5. ピアノ奏法に関する記事について

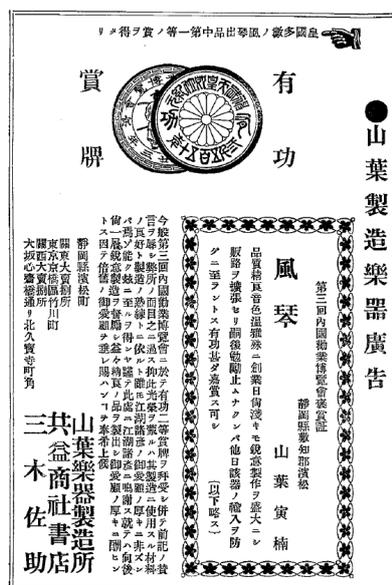
それぞれの雑誌でどのようにピアノが記事となっていたか見ていく。原則として仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に改めた。

##### ①『音楽雑誌』

『音楽雑誌』には、オルガンに関する記事はあってもピアノに関する独立した記事は一切見当たらない。唱歌に関する記事が多数あるのと対照的である。しかし、明治23年9月の『音楽雑誌』創刊号には、その年の4月に行われた内国勸業博覧会で出品されたオルガンとピアノのことが簡単に記されている。記事によると、オルガンでは山葉寅楠が出品者の中で最高の賞である有功二等賞、西川虎吉が有功三等賞を受賞、一方ピアノでは西川が有功二等賞、山葉が三等賞を受賞している。しかし、この時出品されたピアノは、外国から輸入した部品を組み立て

たものであり、国産ピアノとは言えない代物であった（前間・岩野 2001 : 57）。山葉は同号に受賞をアピールする広告を1ページ全面に載せ、事業の躍進ぶりを強調しており（図1）、ライバルである西川を強く意識している。

図1 『音楽雑誌』創刊号における山葉楽器製造所の広告



『音楽雑誌』復刻版（出版科学総合研究所、1984）より転載

この時代、オルガンはすでに量産販売がスタートしていたものの、ピアノ製造に関しては試行錯誤の状態であったようだ。『音楽雑誌』に掲載されている演奏会のレビューにも、伴奏等でピアノが演奏された記録はしばしば登場するが、オルガンやアコーディオンで代用されたケースも多く、また、ピアノが使われたとしてもそれがどのような演奏だったのか触れられることはない。当時の日本においては、ピアノで「何」を「どう」演奏するかということよりも、まずピアノ「作る」こと自体が大きな課題であったと考えられる。

②『同声会雑誌』

「ベートーヴェン氏作むーんらいとそなた」がピアノに関する唯一の記事であった（表2参照）。「むーんらいとそなた」とはベートーヴェンの《ピアノソナタ第14番》作品27-2のことであり、我が国の音楽雑誌にピアノ曲が紹介された初めての記事であったと思われる。しかし、その内容は作曲の由来を小説風に仕立てたものであり、曲の音楽的な内容や演奏表現の問題に立ち入ったものではなかった。

ピアノそのものに関する記事ではないが、当時の楽器事情を知る上で興味深い記事として第2号の「学校用楽器について」、そして第4号、第6号に掲載されていた演奏会情報についても簡単に触れておく。

「学校用楽器について」は、東京音楽学校教授も務めた上原六四郎による記事である。上原によると、学校で唱歌を教える楽器として主に用いているのはオルガンであり、将来的にはオルガンに限定することになると述べている。その上で、学校にふさわしい楽器の条件と

して、音色が清らかで高雅である、人の声域をカバーする音域を持っている、数十人の合唱に耐える音量を持っている、なるべく値段の安いものである、携帯に便利である、などの条件を挙げている。そして、ピアノは値段と携帯性の面において学校用楽器としては不向きであるとされる。

演奏会情報では、東京音楽学校で催された演奏会のプログラムが掲載されている。たとえば、4号の「秋季音楽演奏会記事」では弦楽合奏、唱歌などと並んでメンデルスゾーンの《ロンド・カプリチオーソ》作品14が、6号の「春季音楽演奏会記事」ではシューベルトの《即興曲》(作品番号は不明)が演奏されている。

『同窓会雑誌』では、特定のピアノ曲が記事として取り上げられるようになり、演奏会でも本格的な独奏曲が披露されていた状況を知ることができる。それは、ピアノで「何」を演奏するか、ということへの関心の表れと見ることができる。一方、教育現場にはピアノよりもオルガンがふさわしいと考えられ、着々と学校への配備が進められていた。オルガンとピアノという二つの鍵盤楽器が、それぞれ伴奏楽器と独奏楽器として分化していく過程をここに見ることができる。

表2 『同窓会雑誌』におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
ペーと一ふえん氏作む一んらいと そなた	本元子	1(1)/31-35	明治29年4月	楽曲紹介

### ③『音楽之友』

『音楽之友』には先の二つの雑誌と比べ、ピアノに関する記事が格段に増えている(表3参照)。演奏家に関する記事、メンテナンスに関する記事、作品に関する記事、演奏・練習法に関する記事があった。まず楽器を「作る」ことに関心が傾いていた時代から、それをどのように扱い、「誰」が「何」を「どう」演奏するか、という演奏の領域に読者や執筆者の関心が向かっている状況を確認することができる。ここでは「ピアノ及びオルガンの修繕と調律法」と「ホフマン氏の洋琴家に与ふる勧告」の二つの詳細を見る。

「ピアノ及びオルガンの修繕と調律法」は第3巻第2号から第6巻第1号まで12回にわたって連載された記事である。「序論」には、ピアノやオルガンの需要が増えているにも関わらずそれをメンテナンスできる人間が足りていないこと、特に地方においてはそれが顕著であり、簡単な修理すら行われず放置される楽器が多いと書かれている。しかし、この連載で解説される修理法はかなり専門的である上に分かりづらく、これを読んだからといって読者がすぐに楽器を修繕できたとは思えない。しかし12回も連載が続いているということは、少しでも楽器の構造や管理方法を知りたいという要望があったのだろう。高価な楽器をせっかく購入しても、修理すらできず途方に暮れる当時の人々の様子を想像することができる。記事のタイトルは「ピアノ及びオルガン」となっているが、実際にはオルガンの修繕方法の説明が多く、まだまだオルガンが優勢であったことをうかがわせる。

「ホフマン氏の洋琴家に与ふる勧告」はアメリカ人ピアニスト、ホフマン(Josef Hofmann, 1876-1957)によるピアノ奏法を抜粋、和訳したものである。特に練習に際しての心構えを述べたものであり、機械的な練習に長い時間を割くよりも音楽の流れを優先すること、そして練習

方法に拘泥するよりもオーケストラのコンサートを聴くなどして、音楽性を養うことが勧められている。

表3 『音楽之友』におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
洋琴家パデレウスキー氏の伝	浪楽散史	2(3)/23-25	明治35年	ピアニスト紹介
洋琴家ショパン氏の伝	〃	2(6)	明治35年	ピアニスト紹介
洋琴家ルビンスタイン氏の伝	〃	3(1)/30-31	明治35年	ピアニスト紹介
ホフマン氏の洋琴家に与ふる勧告	木村秋月	3(1)/31-32	明治35年	練習法
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法	村岡祥太郎	3(2)/33-34	明治35年	鍵盤楽器の修繕・調律法
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法	〃	3(4)/30-31	明治35年	〃
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(三)	〃	3(5)/35-36	明治35年	〃
ベートヴェン氏「月光の曲」の由来	寺井天来	4(1)/29-30	明治36年	楽曲紹介
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(四)	村岡祥太郎	4(2)/不明	明治36年	鍵盤楽器の修繕・調律法
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(五)	〃	4(3)/不明	明治36年	〃
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(六)	〃	4(4)/不明	明治36年	〃
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(七)	〃	4(5)/不明	明治36年	〃
米都ワシントンの有名なるピアノ	木村秋月	4(6)/30-31	明治36年	楽器紹介
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(八)	村岡祥太郎	5(1)/不明	明治36年	鍵盤楽器の修繕・調律法
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(九)	〃	5(4)/不明	明治36年	〃
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(十)	〃	5(5)/不明	明治36年	〃
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(十一)	〃	5(6)/不明	明治36年	〃
ピアノ及びオルガンの修繕と調律法(十二)	〃	6(1)/不明	明治37年	〃
ブリキ行進曲	ウィルヘルム・ケーレン	6(5)/記載なし	明治37年	楽譜
ピアノの響笛の音	今村九穂	7(6)/23-35	明治38年	海外音楽事情

④ 『音楽遊戯界』

先述したように、『音楽遊戯界』は子どもが音楽に合わせて踊ったり遊んだりする「遊戯」をテーマとした雑誌であり、ピアノそのものに関する記事は見当たらなかった。しかし、オルガンに関しては「風琴の演奏法」(第1巻第4号など)、「風琴の沿革」(第1巻第5号など)といった記事が複数回掲載されており、遊戯の伴奏としてもっぱらオルガンが使用されていたと考えられる。「風琴の演奏法」では、毎日忍耐強く練習すること、正確に弾けるまで何度も繰り返し練習すること、といった練習論が展開されていた。

⑤ 『音楽月刊』

そもそも散逸している号が多く全容をつかむことができないが、ピアノに関する記事は見当たらなかった。鍵盤楽器に関する記事としては、わずかに第19号で「簡易オルガン修理法」という記事を確認することができた。

## ⑥『音楽新報』

ピアノに関する記事は「ピアノの話」、「『ピアノ』の選択」、「洋琴の器乐的教育」、「バルカロオレ」の4件であった(表4参照)。件数こそ多くはないが、ピアノをめぐる当時の状況を知る上で興味深い記事を含んでいる。

表4 『音楽新報』におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
ピアノの話	梅鶯生	1(3)/48-49	明治37年4月	ピアノの歴史
「ピアノ」の選択	松本新吉	1(5)/31-33	明治37年8月	ピアノの構造
洋琴の器乐的教育	巖本捷治	3(10)/24-27	明治39年9月	ピアノ教育
バルカロオレ	澤田柳吉	4(5)/記載なし	明治40年4月	楽譜

『『ピアノ』の選択』は西川虎吉、山葉寅楠に次ぐピアノ製造の有力者であった松本新吉(1865-1941)によるものであり、現在の国産ピアノが国内の良質な材料を用いた、西洋の音楽家をも満足させる楽器であると記されている。西川らが輸入部品を組み立ててピアノを博覧会に出品したことが『音楽雑誌』に掲載されて14年のうちに、国内のピアノ製造技術が格段に進歩したことが見て取れる。

「洋琴の器乐的教育」は『音楽之友』の創始者の一人であったピアニスト、巖本捷治によるもので、ピアノは「哀れなる従属的」な伴奏楽器ではなく「純然たる独立の器乐的職分」を持っていると述べ、ピアノの専門教育の重要性を説いている。そして海外の例を挙げながら、基礎的な練習から順を追って大曲を習得していくカリキュラムを提案している。

『音楽新報』には、ピアノを学校の伴奏楽器として扱ったものや、オルガンと同等に置いた記事はない。あくまでピアノ演奏そのものに価値を置いており、それを後押しするように国内のピアノ製造会社らが開発に力を入れていく様子が伝わってくる。

## ⑦『音楽』(楽友社)

『音楽』には、第8巻第3号・4号の2回にわたって「プレイディー氏洋琴技巧練習解説」が掲載されていた(表5参照)。ドイツのピアノ教師、ルイ・プレイディー(Louis Plaidy, 1810-1874)の教本を紹介したものであるが、その内容は指の強化のための様々な練習法の提案であり、まず何よりも指の関節を強く、均一に動かすことが重要視されている。基本的には、指を高く上げて打つタッチが推奨されており、今日のように指の角度や打鍵のスピード、指先の感覚などによってタッチや音色を変化させることについての記述はない。また、この教本に載っているありとあらゆる課題を様々な練習方法で毎日繰り返すことが求められており、実際にこの通りに練習を行えば、かなりの時間と労力を要すると思われる。プレイディーの練習曲自体は現在もピアノ学習者に使用されているが、多くのピアノ教本の中で、ひととき機械的で技術に重きを置いたプレイディーの教本がこの時代の音楽雑誌で取り上げられていることは注目に値する。

表5 『音楽』(楽友社)におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
キンデルソナタ	シューマン	8(2)/3-5	明治38年	楽譜
プレイディー氏洋琴技巧練習解説	石倉小三郎	8(3)/75-79	明治38年	練習法
プレイディー氏洋琴技巧練習解説(承前)	〃	8(4)/85-88	明治38年	〃

⑧『音楽世界』

『音楽世界』にはピアノに関連する記事が多く(表6参照)、その内容も楽器紹介、演奏法、練習法、ピアニスト紹介など多岐にわたっている。その中でも「ピアノ、オルガンの弾き方」と「ピアノの練習に就いて」を取り上げ、その内容を検討する。

表6 『音楽世界』におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
ピアノ、オルガン弾き方 [ママ]	長洞生	1(1)/6-8	明治40年	ピアノ奏法
ムーンライトソナタについて	(記載なし)	1(1)/11	明治40年	楽曲紹介
ピアノ、オルガン弾き方(承前)	長洞生	1(2)/4-6	明治40年	演奏法
ピアノ、オルガン弾き方(承前)	〃	1(3)/3-4	明治40年	〃
ピアノの練習に就いて	三善和氣	1(3)/6-7	明治40年	練習法
ピアノの練習に就いて(承前)	〃	1(4)/5-6	明治40年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方(承前)	長洞生	1(5)/3-7	明治40年	演奏法
ピアノ、オルガンの弾き方(承前)	〃	1(7)/3-5	明治40年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方(承前)	〃	1(9)/3-5	明治40年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方(承前)	〃	1(11)/3-6	明治40年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方(続き)	〃	2(2)/3-6	明治41年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方	〃	2(4)/4-6	明治41年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方	〃	2(6)/3-7	明治41年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方	〃	2(9)/3-6	明治41年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方	〃	2(10)/3-5	明治41年	〃
ピアノ、オルガンの弾き方(続き)	〃	2(12)/3-4	明治41年	〃
レシェッツィズキイ其他現代ピアノ名家略伝	〃	5(1)2-6	明治44年	ピアニスト紹介
日本の楽器製造(山葉と鈴木)	T.Y.	5(5)/6-8	明治44年	メーカー紹介
電気仕掛ピアノ	(記載なし)	7(3)/12	明治45年	楽器紹介

「ピアノ、オルガンの弾き方」は13回にわたる連載であるが、その内容は楽譜の読み方の解説が大半を占め、ピアノはおろか五線譜を初めて見る人を対象にしているような内容である。おそらく当時の読者の中には楽器や楽譜を前にしても、どう演奏して良いのか全く分からない人も相当数いたのだろう。終盤にようやく奏法についての記述があり、指の奏法、手首を使った奏法、腕を使った奏法の三つが紹介されている。それによると、指の奏法は、指の力だけで

「槌のごとく上下に」打ちつけるとあり、前述したプレディーの奏法とほぼ同じである。手首を使った奏法は、手首を「蝶番の如く」振る奏法であり、和音やオクターブのスタッカートの際に例外的に用いるとある。続いて腕を使った奏法が紹介されるが、技術的にすぐれていないためあまり使用されないと述べられている。「ピアノ、オルガンの弾き方」ではあくまで指の力のみを使った奏法が推奨されており、この時期欧米ではすでに主流であった、腕の重みを生かした奏法については否定的である。しかし、指のみの力で演奏することは多大な練習時間を要する上に手の疲労を招き、今日では批判されている（大地 2001）。

「ピアノの練習に就いて」は、ホフマンのピアノ奏法を和訳したものであり、前述した『音楽之友』第3巻第1号の「ホフマン氏の洋琴家に与ふる勧告」と全く同じ出典とみられる。なお、ホフマンのピアノ奏法は大正時代に入ってからたびたび雑誌で紹介されており、同じ人物の文章が何度も繰り返し和訳され、しかもそのたびに掲載される分量を増やして読者に紹介されていることは興味深い。「ピアノの練習に就いて」は『音楽之友』の時と同じく、機械的な練習を戒め、技術よりも感性に重きを置いたものである。

#### ⑨『音楽界』

ピアノに関する記事はわずかに2件であったが（表7参照）、「19世紀におけるピアニスト」はクララ・シューマン（Clara Schumann, 1819-1896）やリトロフ（Henri Litolff, 1818-1891）などこれまでの雑誌では取り上げられてこなかった、ややマイナーなピアニストたちを取り上げている点、そして、これまでのピアニスト紹介記事がピアニストの生涯を記しているだけであったのに対し、音色や演奏スタイル、解釈にまで言及している点が進歩的であるといえる。

表7 『音楽界』におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
繁栄なる米国のピアノ商売	青山歌仙	1(9)/12-15	明治41年9月	海外ピアノ事情
19世紀におけるピアニスト	楽峯	3(7)/10-14	明治43年7月	ピアニスト紹介

#### ⑩『音楽』（共益商社楽器店）

これまでの音楽雑誌と比較して、ピアノの「奏法」に関わる記事が多く見られ、より専門的な内容となっている（表8参照）。専門機関である東京音楽学校による雑誌であることを考えれば当然ともいえるが、『音楽雑誌』の創刊より20年の間に、ピアノという楽器への関心が、「製造」や「修繕」から「演奏」へとその方向を変えて社会に浸透してきたことを感じさせる。

『音楽』におけるピアノ奏法の記事は、海外のピアニストによるものと、日本人によるものとに分類することができる。それではまず、海外のピアニストに関する記事を見てみよう。

『パデレフスキーのテンポ、ルバート論』（第1巻第11号）は、ポーランド人ピアニスト、パデレフスキー（Ignacy Jan Paderewski, 1860-1941）によるテンポ・ルバート論を和訳したものである。パデレフスキーは、テンポ・ルバートは「芸術解釈の上において欠くべからざる当然の要素である」としてその必要性を強調し、メトロノームのような機械的なテンポで演奏することは芸術を妨げると説いている。一方、『世界的ピアノ大家レスチェチスキーより我は以下に学びしか』（第3巻第1号、第3号）は、オーストリアのピアニスト、レシエティツキ（Theodor Leschetizky, 1830-1915）に教えを受けた弟子の回顧録を和訳したものである。それによると、レ

シェティツキの教えは「多く考え、少なく弾ずる」、つまり手当たり次第に練習するよりも、作品の構造をよく研究した上で弾け、というものであったという。いずれの記事も、機械的な演奏や練習を戒め、あくまで芸術として音楽に向き合うことを説くものであると言える。

表8 『音楽』（共益商社楽器店）におけるピアノ関連記事

記事名	執筆者	巻(号)/ページ	掲載年	内容
ピアノ自修法 (一)	橘糸重	1(6)/10	明治43年7月	演奏法
ピアノ自修法 (二)	〃	1(7)/30-31	明治43年8月	〃
ピアノ自修法 三 (上)	〃	1(8)/28	明治43年9月	〃
ピアノ自修法 三 (下)	〃	1(9)/35	明治43年10月	〃
ピアノ自修法 (四)	〃	1(10)/28-29	明治43年11月	〃
パデレフスキーのテムポ、ルバート論	田村寛貞	1(11)/1-4	明治43年12月	〃
ピアノ自修法 (五)	橘糸重	1(11)/28	明治43年12月	〃
ピアノ奏法 (六)	〃	2(1)/62	明治44年1月	〃
ピアノ奏法 (七)	〃	2(2)/61-64	明治44年2月	〃
ピアノ奏法 (八)	〃	2(3)/71-74	明治44年3月	〃
ピアノ奏法 (九)	〃	2(4)/55-58	明治44年4月	〃
世界的ピアノ大家レスチェススキーより我は以下に学びしか	こすもす	3(1)/14-20	明治45年1月	〃
世界的ピアノ大家レスチェススキーより我は以下に学びしか (続)	〃	3(3)/26-31	明治45年3月	〃

次に日本人によるピアノ奏法の記事を見てみよう。執筆者の橘糸重は当時、東京音楽学校のピアノ科教授を務めていたピアニストであり、第1巻第6号から第2巻第4号まで10回にわたって、「ピアノ奏法」（ただし始めの6回は「ピアノ自修法）」というタイトルで記事が連載されている。

連載1回目は指番号の確認から始まり、先に述べた『音楽世界』の「ピアノ、オルガンの弾き方」と同じく、一度もピアノに触ったことのない初心者を対象とした内容のように感じられる。この連載中、最も多くの紙面を割いて説明されていたのは指使いに関することであった。それぞれの音型（音階や和音）やポジション（黒鍵の有無など）によって合理的な指使いが異なること、そして1の指を返す時や1の指の上から他の指を返す時の注意が繰り返し書かれている。ピアノの初心者は、黒鍵に親指を多用する、親指を返す際に手首まで大きく上下させるなど不自然な手の使い方をしていることが往々にしてある。おそらく、執筆者の橘もこうした初心者の指使いを多く見てきたのだろう。不自然な指使いではいくら練習しても上達しにくく、まずは正しく合理的な指使いを知ることこそが上達の近道だと橘は考えていたと思われる。

こうして連載は丁寧に進んでいくが、後半から急に技術的な内容が難しくなっていく。跳躍を含む速いパッセージであっても鍵盤を見ずに指の感覚で演奏すること、そして広い音域の和音を素早くつかむことが要求されている。限られた回数の中で、ごく初歩的な事柄から専門的な内容まで幅広く紹介しようとしたと考えられるが、どのように順を追って指導するべきか、

系統立った指導法がまだしっかりと確立できていなかったとも考えられる。また、この連載では音楽の表現や解釈に関する言及はなく、技術的な面に終始していた。そして橘にとってのピアノの「技術」とはあくまで「よく指が回ること」であり、強く、速く弾くことが目標であると繰り返し書かれている。もちろん橘自身の実際の演奏はそれだけではなかったであろうが、作曲家が求めている音楽に見合ったテクニックを探すことよりも、まずは楽譜に書いてある音符を正確に弾きこなすこと自体が当時の学習者の大きな課題であったと推察される。

## 6. まとめ

明治半ばの『音楽雑誌』から明治末期の『音楽』（共益商社楽器店）までの、ピアノに関する記事の検討を行ってきた。音楽雑誌に掲載されたこれらの記事が、当時の社会や音楽教育をめぐる動きとどのように重なるか、そして当時のピアノ奏法がいかなるものであったか、の2点について考察を加えて本稿を終えたい。

『音楽雑誌』では、国内のピアノ製造黎明期の状況を確認することができた。そこでは、ピアノをいかに演奏するか議論は行われず、もっぱら楽器を生産する方向に関心が向いていたのだと考えられる。教育現場でもピアノではなくオルガンが使用されていたことを『音楽雑誌』、『同声会雑誌』、『音楽遊戯界』などを通して知ることができる。その一方で、伴奏楽器ではなく独奏楽器としてのピアノも徐々にクローズアップされるようになってくる。ピアノ曲やピアニストの記事が増え、芸術としてのピアノ演奏そのものに価値が見いだされるようになる。明治30年代後半になると、国内ピアノ製造のレベルが上がってきたこと、それに伴い、ピアノの専門教育を推し進める動きが出てきたことが、『音楽新報』の記事から確認できる。明治43年に創刊した『音楽』に掲載されたピアノの記事は、いずれも独奏楽器としてのピアノの演奏法を論じたものであった。

音楽雑誌から読み取るこれらの動きは、歴史として私たちが知っている明治期のピアノ及びピアノ教育導入の流れと概ね重なっている。しかし、これらの動きが実際にはそれほど単純な流れで一気に生じたわけではないことを、『音楽之友』や『音楽世界』の記事によって知ることができる。これらの雑誌には、明治30年代後半から40年においてもピアノとオルガンを一緒に論じた記事が散見され、「オルガン＝伴奏、初心者」、「ピアノ＝独奏、専門的」という図式が必ずしも当てはまらないことを示している。新しく導入された洋楽によって国内の音楽や教育がばらつきを示しながら漸次的に変化していくさま、そして当時の人々はその動きの中で何を感じていたのかという生の声を、音楽雑誌の記事を通してつぶさに感じ取ることができる。

ピアノ奏法においても、「西洋の音楽をいかに吸収すべきか」に対する国内の音楽家たちの揺動を見ることができる。明治期に見られるピアノ奏法は、「とにかく速く正確に弾けるように毎日、機械的な練習を繰り返すべき」という意見と、「音楽はまず芸術であり、むやみに練習を重ねるよりも音楽的な解釈を深めることに重点をおくべき」という相反する二つの意見が入り混じっている状況であった。テクニックを重視した前者は、主に国内の執筆者による意見であり、音楽性を重視した後者は海外のピアニストによる意見である。

国内の執筆者による記事は、実際に何をどのくらい練習すれば良いのか示されており、実用的である。表現力以前の問題として、書いてある音を正しく読み、正確に指を動かすだけでも困難であるという当時の我が国のピアノ教育の実態を反映していると推察する。しかし、その一方で芸術としての音楽を達成するには、機械的な技術の習得だけでは不十分であることも認

識していたはずである。そのため、海外の音楽家による芸術論が「理想」としてたびたび誌面に登場していたのではないだろうか。海外のピアニストの説く演奏法は、観念的、抽象的で具体性に欠ける。海外の演奏や指導法に直接触れることが極めて困難であった当時においては、記述された情報に頼るしかなく、まるで雲をつかむような話になってしまうのも無理はない。

明治期の音楽雑誌に交互に現れる、技術を重視するピアノ奏法と、技術を超えた表現力を重視するピアノ奏法には、その間をつなぐ「技術をどのように表現に結び付けるか」、「音楽的な解釈をどこに求めるか」の方法論が欠如している。その隔たりが埋まるのは、海外留学の経験を持つ日本人ピアニストたちが国内で活躍し、海外ピアニストたちも来日して教鞭を執るようになる次の時代を待たねばならない。

## 注

- (1) 調査にあたっては、復刻版（出版科学総合研究所刊）を用いた。
- (2) 第5号については国立音楽大学附属図書館、第12号については東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センターにて調査を行った。
- (3) 第1巻第1号～第6号については、昭和女子大学図書館にて調査を行った。

## 参考文献

- 市川理恵(1996)「音楽取調掛におけるピアノ教育の導入」、『日本女子大学人間社会研究科紀要』2、41-51。
- 遠藤宏(1948)『明治音楽史考』有朋堂。
- 大地宏子(2001)「戦前の教本に見る日本のピアノ教育の一側面——打鍵表象の問題を中心に」、『国際文化学』5、71-86。
- 国立音楽大学音楽研究所編(1978)「明治以降音楽雑誌(洋楽)について」、『音楽研究所年報』2、19-22。
- 国府華子(1999)「わが国における明治期のピアノ教育——音楽取調掛、東京音楽学校を中心に」、『音楽教育史研究』2、25-36。
- 後藤暢子(1982)「明治・大正・昭和三代の音楽雑誌を読む(上)」、『フィルハーモニー』54(10)、24-31。
- 坂本麻実子(2012)「東京音楽学校甲種師範科のピアノ教育とその成果」、『桐朋学園大学研究紀要』38、75-87。
- 武石みどり(2009)「明治初期のピアノ：文部省購入楽器の資料と現存状況」、『東京音楽大学研究紀要』33、1-21。
- 田中智晃(2016)「戦前期における楽器流通史の研究——大阪三木佐助商店の事例を中心に」、『社会経済史学』82(1)、75-92。
- 前野孝則・岩野裕一(2001)『日本のピアノ100年——ピアノづくりに賭けた人々』草思社。
- 増井敬二(1984)『音楽雑誌(おむがく)』解題、『音楽雑誌 復刻版・補巻』、5-33。

## 付記

本研究の一部はJSPS 科研費 JP18H05560 の助成を受けたものである。